

第三章 京都市三大事業雜纂

一、六十年史外の追加

博士の生涯の半ば以上を銷盡せる此の大事業

あゝ琵琶湖疏水開通後今や三十有餘年。一世の疑悞を却け紛々たる異論を排し、艱苦と戦ひ窮乏に堪へ、幾度か絶望の淵に臨み、酸鼻の悲劇に會しつゝ、現在の成功を贏ち得たる博士が信倨經營の勞や、如何に高貴なるものありしぞ。

博士六十年史外追加の理由

斯くして博士の綠髮いつしか霜を帯び來るにつれ當年處女の如かりし端麗の俤、また何處にある。我が國工業界の元老たる博士は其の生涯の半ば以上、此の大事業のために銷盡したりと謂ふも、斷じて過言でない。故に、編者は此の編を終るに當りて、博士六十年史の領域を逸するも、大正十一年に於ける英國皇儲殿下の京都帝國大學御來臨の際、市の水理に關し殿下の御下問をうけて、博士の奉答せる一事、並びに、同年十二月、京都市舉行の三大事業記念式に對する博士の感想を録し、博士の大功業に對する印象を新たにするの、決して贅疣ならざるを信するのである。

二、英皇儲殿下の京都帝國大學台臨

大正十一年四月英皇儲大學台臨次第

英皇儲殿下の京都帝國大學に台臨あらせられたるは、實に大正十一年四月二十九日のことであつた。殿下にはハルセー侍從等を隨へさせられ、此の日午後二時十五分、大宮御所を御出門、自働車にて順路市民の奉迎を受けさせられ、大學本部に御到着遊ばされた。

大學の御歡迎設備

これよりさき、大學にては本部の階上を清掃し、南の室を殿下御一行の御休憩の間にあて、卓上に盛花を置き、なほ大學より殿下に捧呈すべき御歡迎文は表装して之を室内東方の机上に擴げ、西方の机には田邊博士より献上の筈なる幅一尺三寸長三尺五寸絹本極彩色、金鏤表裝純銀軸の京都市琵琶湖疏水線路及び湖水の一部を日本流の鳥瞰圖に描いた軸物が擴げられたる外、特製三方金日本綴の博士の著書琵琶湖疏水誌の中、英文にて書かれある部分が開かれてあり、其の側に明治六年の英國雜誌 *Nature* April 3. 1873 の中なる *An Engineering College in Japan* と云ふ部分が開いてあるのであつた。而して北の間には大學に於いて台覽に供すべき日英間の古文書等を陳列してあつた。殿下歡迎の式場は本部建物入口より隔て、

英皇儲殿
下御到着

やゝその北方に設けてあつた。

當日は幸ひに好天氣であつた。大學門内の門脇から本部建物入口までに學生教官等が整列して御待申上げて居ると、やがて御駐在所の大宮御所御發車との報が來た。程なく殿下御一行の自働車は奉迎諸員の列前を御通過相成つて本部二階南の間に台臨、これより大學歡迎文の展開してある横を御通過になつて豫定の御席に御着、爰にて六七人の教官等に握手を賜ひ、直に西方へ御歩みになつて博士の側に來られ博士に握手を賜はつた。

博士が殿
下に御説
明申上げ
し大要

博士は先づ鳥瞰圖中で御駐在所の大宮御所と京都帝國大學と琵琶湖を御示し申上げると、殿下は其の湖水は昨日行つて見た所だと仰せになつた。博士は更に疏水線路を指して、此の湖水から其の水が通水してあつて、電燈電力電氣鐵道及び京都市の上水等も此の水力を源とし、且つ此の水路は京都市の爲に非常に有用なる趣を言上すると、「夫は結構だな」と仰せられた。博士は更に此の疏水事業は西曆千八百九十年に完成し、當時世界に稀なりし水力電氣事業を創始せるものであり、且つ此の事業は日本人の手で設計、監督、施工をしたものであると申上げると、「フー」と御頭を傾けられた。博士は更に其の日本人は英國人が創立の任に當つた工部大

學校で、其の英國教授より授業を受けし者に外ならざるを述べ、其の當時の事が此處にある五十年前の雜誌に記載せられありとてネーチユリア雜誌について、工部大學校創立の由來を御説明申上げ、後にこれが東京大學の工學部の基となり、それから又更に京都帝國大學の設立せられたる顛末を簡單に申上げると、殿下は大いに御満足遊されて「實に面白き由來である」と仰せられた。此の間に大學の事務官は大學の御歡迎文を函に納め、又屋外では學生其の他一同が式場の方へ集合する。殿下には二時二十一分式場へ向け御發途になつた。

式場にては荒木大學總長は、殿下に御歡迎文を捧呈する旨を述べて函に納めたるまゝ之を差上げると、殿下はそれを御受取になつて御附の方に御渡しになり、御挨拶の御言葉を賜ひ、次いで大學本部の北の廣間へ御來臨になつたのは二時三十二分であつた。

博士は式が終ると、直に南の廣間に來て、獻上品を包んで二重の箱に入れ、紐を結んで用意をする。事務官は大學の御歡迎文を更に殿下の御隨行員より受取つて、南の間でこれを外箱に入れたのである。

殿下御退

斯くて博士と事務官とは、獻上品を携へて本部の出口で御待ち申上げて居ると、殿

殿下の御満足

場と博士
の献上品

下は北の間の台覧品を御覽の後御退場になつた。時に二時三十八分。大學歡迎文と博士の献上品とは御附の人の自働車に入れられ、諸員の奉送裡に還啓あらせられた。

光榮の日
に一層追
懷せらる
、恩師ダ
イヤー氏
のこと

斯かる光榮の日に於いて、博士の最も遺憾に感せしは恩師ダイヤー氏が五年前に死去され、同夫人もまた昨年長逝せられて居ることである。博士は英國皇儲殿下へ氏の偉大なる功績を申し上げ、殿下の御満足に思召されたる此の日の次第を、氏夫妻に報ずるの途なきを痛惜し、轉た恩師を哀しむの情を禁じ得なかつたのである。

三、市三大事業十週年記念

博士が十
週年記念
式に對す
る感想

次ぎに博士の京都市三大事業十週年記念式に對する感想談は、大正十一年十月二十九日發行の大阪時事新報紙上に掲載せられて居る。其の全文を引きて當年博士の感懷を偲び、以つて本章を結ぶであらう。

京都市三事業創業十周年記念式と殉職招魂祭とが舉行されること云ふことである。事業の成績が良好であつて誠に目出度。此三事業の中心となつたものは、第二の疏水工事である。其譯は其水が水道の水源となり、其電力が電車を動かす力となつて居るからである。此第二疏

水の起因は第一の疏水にあつて、明治二十三年に、第一の疏水が其水電力を起したときは、其電力の利用法には相當に苦心したもので、事務では朝尾下間木村氏、技術の方では長谷川小木、加藤氏なきの盡力で、明治三十二年には此電力を利用し盡して餘力がないことになつた。

第一疏水をもつと大きく 作つたらよかつたに、今では思ふが、其當時は大きすぎて心配したものであつた。そこで第一の疏水は大渴水の時でも引水出来る様に、其水面が湖水の常水より大いに下けてあるから、張石の目塗堤防の嵩置等をやつて、水門を開いて餘分の水を之に引入れようとしたが、淀川改修の結果、湖面が低下して餘分を引水するところではなく、定量さへも引入六ヶ敷い場合が出来たので、思ひきつて第二の疏水を計畫することゝなつて、其調査が出来たのが明治三十五年の三月であつた。此の時には宇治川水電氣會社も發起されてあり、此會社からも大阪滋賀からも色々反對が起つた。政府では其次第もあり水量に餘分を存したいところから、此第二の疏水は許可しなくなつたのであつたが、一秒時五百五十立方尺の水量は餘裕のあること、第一の疏水の引水に湖面低下が關係することを申立て、追つたから、いやまは云へないことゝなつた。今日考へて見れば、もつと多く引水することゝ出来なかつたものか、考へられるが、

當時は此水量でさへも政府を 納得させるには容易ではなかつた。明治三十九年の四月に漸く許可された。工事は都合よく進んで、明治四十五年に完成した。京都の水道の水源は

何にしようか云ふには色々の調査があつたが、第二疏水の水より外にない云ふ結論になつた。淨水法は山科地方に緩速な瀘過地を作つて、其の水を京都へ送るがよいか、又京都の高地には相當な地積のころもなく湖水の水質から考へても、急速瀘過式にした方が宜しいかとの調査の末に現在の急速式にきまつた。内地で初めてのころでもあり、色々心配したが好結果であつたのは芽出度いころである。京都市中の道路を擴築せんころは以前から目論まれて、七條停車場から東本願寺の前まで僅かなころは出來て居つたが、烏丸通一本丈も出來なかつたのが、此の時に東西に四本南北に三本の位置を決定するころが出來た。當時其の調査には相當苦心をしたものであつたが、都合のよかつたころには、御所の周圍へ電鐵線を作つてはいけないか、某々神社を削つてはいけないか、某邸は避けねばならぬか云ふ様な事を中央政府から申して來なかつたので、

選擇が實際に善いと思ふところへ決定　するころが出來た。此の三事業をするには

凡そ二千萬圓を要するので内務省ではこれを縮小するがよろしい云ふ議であつたが、遂に縮小せずに濟んだのは西郷市長の努力である。又此の工費の金融問題に就いては故早川千吉郎氏は實に尠からず努力された。右の三事業の好成绩を得たのは助役であつた川村、大野、兩氏其の他市役所の人は勿論、井上、大瀧、境田、原、永田、大杉、安田、清水、岡村、多田、山田、菊池、塚本、黒須、田邊、陶山、野依氏等の盡力によるもので、今では故人になつた難波氏は電氣に關する顧

問であつて、中村輪氏は一工區の主任であつた。此の場合に招魂祭の舉行されることは誠に嬉しい事であるが、慾を云ふは鐵道省の様に京都市でも年中行事として、毎年一定の時期に招魂祭がしてほしいと思ふ。

第五編 終